

3 地形と遺跡立地、集落立地、古地図等を読み解く

(1) 地形図の読み取り方

国土地理院ホームページに「防災にも役立つ！地理院地図の使い方」という便利なサイトがあります。このサイトを使うとパソコンでもスマホでも簡単に自宅周辺の自然地形・人工地形の状況を確認することができ、図10の土地の成り立ちと自然災害リスク一覧を参考に、自宅が大雨の際の崖崩れや浸水の心配がないか、また豊川下流域の低地や沿岸部では台風の際の高潮や地震の際の揺れや液状化の心配がないかなどを簡単に



図9 地理院地図の自然災害リスク表示一例（古川沿い）

確認することができます。図9のように自宅周辺に位置を合わせ、地形の状況を確認してみてください。市内下郷地区であれば、自宅が自然堤防（黄色）にあれば微高地に立地すると判断できますが、旧河道（青色）や氾濫平野（薄黄緑色）、後背低地・湿地（青緑色）にあるようでしたら、浸水や液状化等のリスクが大きいことに注意を払う必要があります。

地形分類	彩色	土地の成り立ち	地形から見た自然災害リスク
山地	灰色	尾根や谷からなる土地や、比較的斜面の急な土地。山がちな古い段丘崖の斜面や火山地を含む。	大雨や地震により、崖崩れや土石流、地すべりなどの土砂災害のリスクがある。
崖・段丘崖	紫色	台地の縁にある極めて急な斜面や、山地や海岸沿いなどの岩場。	周辺では大雨や地震により、崖崩れなどの土砂災害のリスクがある。
台地・段丘	橙色	周囲より階段状に高くなった平坦な土地。周囲が浸食により削られて取り残されている。	河川氾濫のリスクはほとんどないが、縁辺部の斜面近くでは崖崩れに注意。地盤は良く、地震の揺れや液状化のリスクは小さい。
山麓堆積地形	濃灰色	山地や崖・段丘崖の下方にあり、山地より斜面の緩やかな土地。	大雨により土石流が発生するリスクがある。地盤は不安定で、地震による崖崩れにも注意。
自然堤防	黄色	現在や昔の河川に沿って細長く分布し、周囲より0.5～数メートル高い土地。河川が氾濫した場合に土砂が堆積してできる。	洪水に対しては比較的安全だが、大規模な洪水では浸水することがある。縁辺部では液状化のリスクがある。
凹地・浅い谷	薄緑色	台地や扇状地、砂丘などの中にあり、周辺と比べてわずかに低い土地。小規模な流水の働きや、周辺部に砂礫が堆積して相対的に低くなる等である。	大雨の際に一時的に雨水が集まりやすく、浸水のおそれがある。地盤は周囲（台地・段丘など）より軟弱な場合があり、とくに周辺が砂州・砂丘の場所では液状化のリスクがある。
氾濫平野	薄黄緑色	起伏が小さく、低くて平坦な土地。洪水で運ばれた砂や泥などが河川周辺に堆積したり、過去の海底が干上がったりしてできる。	河川の氾濫に注意。地盤は海岸に近いほど軟弱で、地震の際にやや揺れやすい。液状化のリスクがある。沿岸部では高潮に注意。
後背低地・湿地	青緑色	主に氾濫平野の中にあり、周囲よりわずかに低い土地。洪水による砂や礫の堆積がほとんどなく、氾濫水に含まれる泥が堆積してできる。	河川の氾濫によって周囲よりも長期間浸水し、水はけが悪い。地盤が軟弱で地震の際の揺れが大きくなりやすい。液状化のリスクがある。沿岸部では高潮に注意。
旧河道	青色	かつて河川の流路だった場所で、周囲よりわずかに低い土地。流路の移動によって河川から切り離されて、その後には砂や泥などで埋められてできる。	河川の氾濫によって周囲よりも長期間浸水し、水はけが悪い。地盤が軟弱で地震の際の揺れが大きくなりやすい。液状化のリスクがある。

図10 地形別土地の成り立ちと自然災害リスク一覧(地理院地図 HP 解説より)

したが、音羽川下流域にはかつては碁盤の目のように区画された条里制の水田が残り（図 12）、また当時の音羽川は国府のある台地のすぐ西側の低地から南方に延びる低地（御津町域の安藤川沿い）を流れていたとも言われ、国府高等学校の南東側の水田地帯には「船原」の小字名も残り、当時音羽川の河口近くには国府の外港が設けられ「御津」の地名の由来になったとされています。

また古代には、古代東海道沿いの篠束辺りに駅家が設けられ、豊川（当時は飽海川と呼ばれた）の渡しは「しかすがの渡」と呼ばれていましたが、平安時代中頃から水量の増加で難所となり、東西の交通は豊川の上流を迂回する新街道（俗に鎌倉街道と呼ばれる）に移りました。新たに豊川宿（現古宿町辺りか）が興り、東側（松原用水沿い）には豊川の流路の一つが流れ、古代～中世の遺跡でもある郷中遺跡（三谷原町）等を中継地として、二百数十年の間、豊川宿経由で網の目状に乱流する豊川を渡河する新街道が東西交通の主流となっていたようです。

また戦国時代に市域では牧野氏が勢力を拡大し、東の今川、西の松平との間で攻防を繰り返しました。牧野氏は、当初牧野城（牧野町）を拠点として一色城（牛久保町）を攻め落とすと、瀬木城（瀬木町）、今橋城（豊橋市：後の吉田城）、牛久保城（牛久保町）を順次築いて東三河一帯に基盤を築きました。図 11 を見てわかるとおり、戦国時代の城館（図 11 の凸印）は、豊川や音羽川等の河川の旧河道沿いや臨海部に立地する 경우가多く、牧野氏に関わらず戦国期の領主は、防御の側面のみならず河川や三河湾の水運も重視して城館を築き領地の経営にあたっていたことがわかります。

なお、近世の村々の配置は図 4 の絵図のとおりですが、明治時代の地図で確認できる集落は、近世の集落立地を踏襲するものがほとんどで、河川沿いの低地でも自然堤防等の微高地上に集落が立地する 경우가多く、集落内の村役場や小学校、神社や寺院が揃う場所は同じ低地の中でも災害リスクが相対的に低い場所だと言えます。一方、都市化の進展により低地を埋め立てたり、山地を造成したりして新しく住宅団地が形成されている場合や新設の学校の場合には、災害リスクが高い場合もあるので注意が必要です。

豊川市防災センターのロビーに備えてある「今昔マップ」（図 13）は、明治時代の古い地図と現代の地図を瞬時に比較し、危険度カルテも表示される優れたものです。皆さんも一度防災センターを訪ねて、自宅周辺の明治時代の地形や土地利用の様子、危険度カルテを確認してみてください。



図 12 音羽川下流域の条里遺構（S32 年）



図 13 防災センターで楽しめる今昔マップ

(3) 名所図絵や古地図を読み解く

① 古代の「しかすがの渡」と現在の土地利用

江戸時代後期に刊行された『三河国名所図絵』には、平安時代に清少納言が三大渡しの筆頭に挙げ歌に詠まれた「しかすがの渡」のイメージ図が「志之須香渡古図」として図14のように掲載されています。図15のように、平安時代当時の海岸線は、JR東海道線辺りまで入り込んでいたと推定され、「しかすがの渡」は豊川市側の平井～小坂井辺りから豊橋市側の牟呂坂津辺りを結んでいたと考えられています。前芝（豊橋市）をはじめ河口部の集落は、往時は人の住まない島状の中洲であり、平井町や小坂井町の低地部の小字名には「広見島」「大島」といった地名が今も残っています。現在では、図16の航空写真に見られるように、かつて海が入り込みヨシやアシの茂る湿地であった場所近くの幹線道路沿いに工場、倉庫、店舗、病院、学校、介護施設などが立地しています。しかし、この辺りは豊川放水路や沿岸堤防整備前には、洪水や高潮、津波等の被害をたびたび受けた地域であり、現在でもそうした災害リスクを抱えていることを改めて認識しておく必要があります。

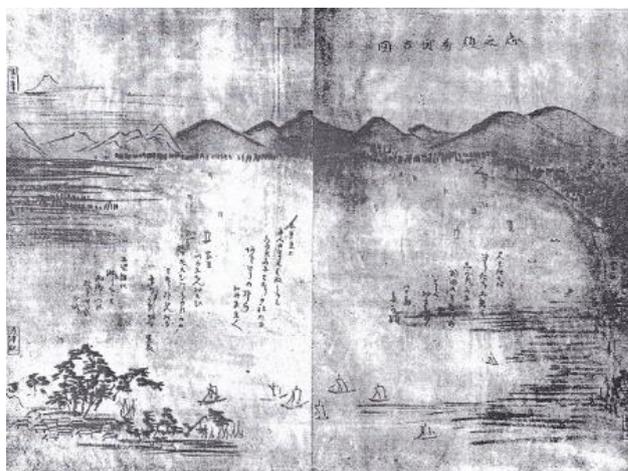


図14 志之須香渡古図『三河国名所図絵』



図15 古代の推定海岸線（松岡編 2018 参照）



図16 豊川河口部の現在の航空写真（豊川橋西方上空より：豊川市防災ドローン航空隊撮影）

② 和泉式部の歌に詠まれた緑野池と霞地区

『三河国名所図絵』には「八名郡緑野池」として、平安時代に和泉式部の歌に詠まれたとされる「緑野池」が描かれています(図 17)。近くの豊川の入江は「ロツパイ」と記され、現在の三上町西六盃・東六盃付近にかつて緑野池があったことが知られ、その右側には豊川の渡しの様子が描かれています。また、この地区には「間川」「南中島」「北中島」「沖」といった豊川に注ぐ間川沿いの低地にちなむ小字名が現在も残っており、現在六盃橋付近の県道沿いに和泉式部が「みどり野」を詠んだ歌の歌碑が建てられています(図 19)。

ところで豊川左岸には、金沢・賀茂・下条・牛川の4地区に霞堤(不連続堤)が今も残っていますが、昭和40年に豊川放水路ができた以降も、大雨のたびに霞地区では浸水被害を受けることがあります。緑野池のあった豊川市三上町の西六盃周辺は賀茂霞の差し口(開口部)にあたり、平成23年9月の台風15号(図18)や平成30年9月の台風24号の際にも浸水被害を受けています。また、金沢霞の差し口の地名は金沢町西峽(ニシザワ)で、三上町西六盃同様、やはり大雨のたびに差し水による浸水を繰り返しており対策が急がれます。



図 17 緑野池『三河国名所図絵』



図 18 西六盃付近の浸水状況(H23)
(国交省豊橋河川事務所 HP より)



図 19 和泉式部「みどり野」歌碑



図 20 三上町西六盃周辺の航空写真(三上橋南西上空より:豊川市防災ドローン航空隊撮影)

③ 赤坂の古地図と「大崩」地名

赤坂宿の幕末の古地図(図21)から、赤坂宿と長沢村の境には、かつて大崩(おおくずれ)と呼ばれた地名があったことがわかります。現在の赤坂町西縄手の音羽中学校のグラウンド辺り(図22の赤色楕円)と推定され、南西側の小山(図22の赤丸:古地図では丸山とされる)周辺には土砂災害危険箇所がいくつもあります。丸山の南西側では昭和38年頃の大崩で山中に割れ目ができ、その後地すべり防止区域に指定されて地すべりの安定を図る工事が行われ、現在は赤坂緑地公園(地すべり学習公園)として整備されています(図23)。

この大崩周辺の土砂災害に関する伝承として、北西約600mの長沢町栄善寺にある大如来像について「切山川の奥の大日嶽にあった西興寺に安置されていたものが、享祿3年(1530)8月の大風雨により山崩れで堂宇が流出し、音羽川を下り寺近くまで流されたものである」といった言い伝えがあります(三河国宝飯郡誌)。また「崩」に関連した市内の小字名には、平尾町に「木崩」(平尾カントリークラブゴルフ場内)が、また市田町に「崩」(赤塚山公園宮池エリア)があり、崩壊地名として注意を払う必要があります。

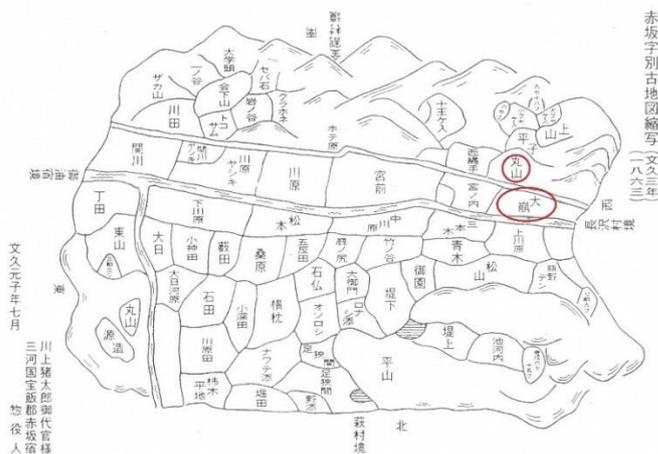


図21 赤坂字別古地図縮写(音羽町誌より)

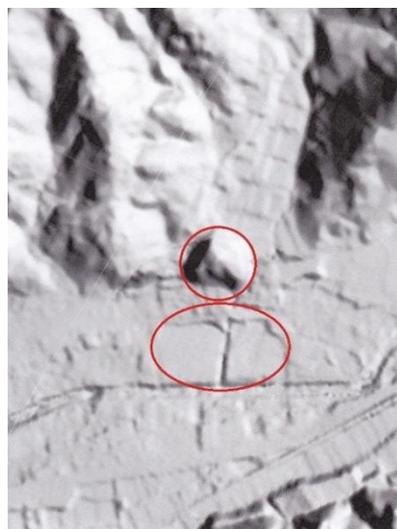


図22 地理院地図陰影起伏図「大崩」付近



図23 赤坂緑地公園



図24 音羽中学校周辺航空写真(豊川市防災ドローン航空隊撮影)